11　　やけぼっくい　　　　　　　　　　　　文法　助詞②　副助詞・係助詞

読解　心情をつかむ

新傾向 類似した話と比較する

あるに、忍びて通ふ人やありけむ、①いと美しきさへで来にければ、あはれとは思ひきこえながら、きびしき片つ方ⓐやありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじう慕ふが②うつくしうて、ほど経て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて㋐めづらしくや思ひけむ、かきでつつ見ゐたりしを、③え立ちとまらぬことありて出づるを、例のいたう慕ふがあはれに㋑おぼえて、しばし立ちとまりて、「さらば、いざよ」とて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でばのひとりやいとど思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、の後にて聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児もかへして、そのままにⓑなむ居られにし。

* 語注

ある君達＝ここではある姫君。

片つ方＝もう一人の方、ここでは男の正妻。

火取＝香炉の一種。くときは、籠をかぶせる。

【原文】

ある君達に、忍びて通ふ人やありけむ、いと美しき児さへ出で来にければ、あはれとは思ひきこえながら、きびしき片つ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじう慕ふがうつくしうて、ほど経て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにてめづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ゐたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを、例のいたう慕ふがあはれにおぼえて、しばし立ちとまりて、「さらば、いざよ」とて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屛風の後にて聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児もかへして、そのままになむ居られにし。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

ある姫君に〔　　　　　〕通う男がいた。子どももできたが、女のところへは〔

〕になっていた。子どもは男を慕っており、久しぶりに会うと懐いてくる。連れて帰ろうとしたところ、女は〔　　　　　　　　〕に見送り、〔　　　　　　　　〕な声で歌を詠んだ。それを聞いた男は、いとおしく思い、〔　　　　　　　　〕とどまった。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（終止形でよい。）〈３点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ・ⓑの結びの語を文法的に説明せよ。〈３点×２〉

ⓐ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

ⓑ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問四　チェック問題　［助詞②　副助詞・係助詞］

　次の傍線部の副助詞の用法を後から選び、記号で答えよ。〈１点×２〉

１　ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。　　　　　　　　 （竹取物語）

２　蛍ばかりの光だになし。　　　　　　　　　　　　　　 （竹取物語）

ア　限定　　イ　強意　　ウ　程度　　エ　添加　　オ　類推

　１〔　　　〕　２〔　　　〕

問五 傍線部①・③を現代語訳せよ。〈５点×２〉

①〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六 傍線部②とあるが、男は子どものどのような点を「うつくしう」と感じているのか。三十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　「こだにかく…」の和歌について、

⑴「ひとり」は何と何との掛詞か。漢字で答えよ。〈５点〉

〔　　　　　　　　　　と　　　　　　　　　　〕

⑵　和歌に込められた女の思いとして最も適当なものを選べ。 〈７点〉

ア　子どもでさえ男についていきたいのだから、私はなおさらついていきたい。

イ　男が出ていくのはしかたがないが、せめて子どもだけでも手元においてほしい。

ウ　あなただけではなく子どもまでも出ていって、私だけにしないでほしい。

エ　子どもだけをかわいがるのではなく、私のことも大切に思ってほしい。

〔　　　〕

問八　本文を読み終えたＡさんは、女のんだ和歌に感動してより（仲）が戻るという話型について、さらに詳しく調べて発表することにした。同じ作品内を探したところ、「はいずみ」という章段に類ウ似した話を見つけたため、対応箇所を抜き出し、比較した。【比較した内容メモ】のうち、適当でないものを一つ選べ。〈４点〉

【資料】

　男が新しい愛人を迎えるというので、女はお付きの童とともに家を去ることになった。女は馬を走らせ、荒れ果てた小さな家に到着した。童が男の家に戻ることになり、男に伝えることはあるかと尋ねたところ、女は次のように言った。

（女は）泣く泣く、「かやうに申せ」とて、

　　いづこにか送りはせしと人問はば心はゆかぬ涙川まで

と言ふを聞きて、童も泣く泣く馬にうち乗りて、ほどもなく来つきぬ。

男がふと目を覚まして見ると、月も西の山の端近くになっていた。「妙に童の帰りが遅いものだなあ。遠いところへ女を送りに行ったのだなあ」と思うにつけて、女の気持ちがたいそうしみじみと感じられるので、次の和歌を詠んだ。

住みなれし宿を見捨てて行く月の影におほせて恋ふるわざかな

と言ふにぞ、童帰りたる。

（男が）「いとあやし、など遅くは帰りつるぞ。いづくなりつるところぞ」と問へば、ありつる歌を語るに、男もいと悲しくて、うち泣かれぬ。

「女がここで泣かなかったのは」、平静を装っていたのだなあ」としみじみと感じられたので、男は女を連れ戻すことにした。

【比較した内容メモ】

女の詠んだ和歌の技法・修辞

ア　本文の女（君達）は、掛詞に加えて「火取」の縁語を巧みに使用し、【資料】の女は「涙川」という比喩表現を用いて、悲しみを含む心情を表した。

和歌が伝わる前の男の様子（女への思いや行動）

イ　本文の男（通ふ人）は、女（君達）ではなく子どもだけに一緒に来るよう声をかけたが、【資料】の男は、住み慣れた家を後にした女への恋しさを月の光に関連付けて詠んだ。

和歌の伝え方

ウ　本文の女（君達）は、男（通ふ人）が屛風の後ろにいることをわかった上で、聞こえるように和歌を詠み、【資料】の女は、童に命じて男に和歌を伝えさせた。

和歌を聞いた時の男の反応

エ　本文の男（通ふ人）は女（君達）をたいそう愛しく思い、【資料】の男は悲しみの涙を流した。双方とも女の和歌に共鳴したことがえるが、和歌のどの部分に感動したのかは明記されていない。

〔　　　〕

【解答】

問一　忍びて／絶え間がち／心苦しげ／忍びやか／そのまま

問二　㋐＝かわいらしい（いとしい）　㋑＝（自然に）思われる〈３点×２〉

問三　ⓐ＝過去推量の助動詞「けむ」連体形

　　　ⓑ＝過去の助動詞「き」連体形〈３点×２〉

問四　１＝エ　２＝オ〈１点×２〉

問五　①＝たいそうかわいらしい子どもまでできてしまったので、

　　　③＝立ち止まることができないことがあって出発する〈５点×２〉

問六　あまり会わない自分のことを忘れずに、たいそう慕ってくれる点。（30字）〈10点〉

問七　⑴　一人と火取（完解）〈５点〉

　　　⑵　ウ〈７点〉

問八　ウ〈４点〉

【現代語訳】

ある姫君に、人目を忍んで通う男があったのだろうか、たいそうかわいらしい子どもまでできてしまったので、（通ふ人（通う男）は姫君を）いとしいとは思い申し上げるものの、やかましい正妻があったのだろうか、（訪問が）途切れがちでいるところに、（児（子どもが）男を）きちんと覚えていて、たいそう慕うのがかわいらしくて、長らく途絶えて（いた後）立ち寄ったところ、（その子が）たいそう寂しそうな様子であってかわいらしく思ったのだろうか、（通ふ人（通う男）は子どもの頭を）撫でながらじっと見ていたが、立ち止まることができないことがあって出発するのを、いつものようにひどく慕ってくるのがいとおしく思われて、（通ふ人（通う男）は）しばらくの間とどまって、「それなら、一緒においで」と言って、（児（子ども）を）抱き上げて出たのを、（君達（姫君）は）本当にやるせなさそうに見送って、前にある火取の香炉をまさぐりながら、

子どもまでもがこのようにふらふらと出て行ってしまったら、薫物の火取というその語のとおり、私は一人でいっそう人恋しく、物思いに思いこがれる（ことになるの）でしょうか。

とこっそりと口ずさむのを、屛風の後ろで（通ふ人（通う男）は）聞いて、（君達（姫君）を）たいそういとしいと思われたので、子どもも返して、（男は）そのままとどまりなさった。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「こだにかく…」の和歌について、「だに」は類推の副助詞であるが、この場合、何から何を類推しているのか。次の空欄に入る本文中の語句を答えよ。

［　Ａ　］が出ていくことから［　Ｂ　］までもがいなくなることを類推。

問２　「児もかへして、そのままになむ居られにし」（８～９行目）とあるが、男がこのようにした理由として最も適当なものを選べ。

ア　自分が屛風の後ろに隠れているのを、女に気づかれてしまったから。

イ　女の歌を屛風の後ろで立ち聞きしていたことを、深く反省したから。

ウ　男の身勝手さを責める女の歌を聞いて、申し訳なく思ったから。

エ　子供にまで去られた孤独な身の上を詠んだ女の歌に、心を打たれたから。

【補充問題解答】

問１　Ａ＝子　Ｂ＝ある君達

問２　エ